

司式: 鮎川 健一
奏楽: 吉田千鶴子

前奏: 「われらより取り去りたまえ、主よ、まことなる主よ」(0. ブクステフデ)

招詞: 沈黙してあなたに向かい、賛美をささげます。シオンにいます神よ。
あなたに満願の献げ物をささげます。(詩 65:2)

讚美歌 385「花彩る春を」

罪の告白・赦し

聖霊を求める祈り

朗読聖書①詩 136:1-3

- 01 恵み深い主に感謝せよ。慈しみはとこしえに。
- 02 神の中の神に感謝せよ。慈しみはとこしえに。
- 03 主の中の主に感謝せよ。慈しみはとこしえに。

朗読聖書②ヘブル人への手紙 11:1-16 ◆信仰

- 01 信仰とは、望んでいる事柄を確認し、見えない事実を確認することです。
- 02 昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました。
- 03 信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉によって創造され、従って見えるものは、目に見えているものからできたのではないことが分かります。
- 04 信仰によって、アベルはカインより優れたいけにえを神に献げ、その信仰によって、正しい者であると証明されました。神が彼の献げ物を認められたからです。アベルは死にましたが、信仰によってまだ語っています。
- 05 信仰によって、エノクは死を経験しないように、天に移されました。神が彼を移されたので、見えなくなったのです。移される前に、神に喜ばれていたことが証明されていたからです。
- 06 信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神が存在しておられること、また、神は御自分を求める者たちに報いてくださる方であることを、信じていなければならぬからです。
- 07 信仰によって、ノアはまだ見ていない事柄について神のお告げを受けたとき、恐れかきみながら、自分の家族を救うために箱舟を造り、その信仰によって世界を罪に定め、また信仰に基づく義を受け継ぐ者となりました。
- 08 信仰によって、アブラハムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に出て行くように召し出されると、これに服従し、行き先も知らずに出発したのです。
- 09 信仰によって、アブラハムは他国に宿るようにして約束の地に住み、同じ約束されたものを共に受け継ぐ者であるイサク、ヤコブと一緒に幕屋に住みました。
- 10 アブラハムは、神が設計者であり建設者である堅固な土台を持つ都を待望していたからです。
- 11 信仰によって、不妊の女サラ自身も、年齢が盛りを過ぎていたのに子をもうける力を得ました。約束をなされた方は真実な方であると、信じていたからです。
- 12 それで、死んだも同様の一人の人から空の星のように、また海辺の数えきれない砂のように、多くの子孫が生まれたのです。
- 13 この人たちは皆、信仰を抱いて死にました。約束されたものを手に入れませんでした、はるかにそれを見て喜びの声をあげ、自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいの者であることを公に言い表したのです。
- 14 このように言う人たちは、自分が故郷を探し求めていることを明らかに表しているのです。
- 15 もし出て来た土地のことを思っていたのなら、戻るのに良い機会もあったかもしれません。
- 16 とところが実際は、彼らは更にまさった故郷、すなわち天の故郷を熱望していたのです。だから、神は彼らの神と呼ばれることを恥とさないません。神は、彼らのために都を準備されてい

たからです。

祈祷

天地万物の造る主、真の命にして復活の主なる御子イエス・キリストの父なる御神さま、聖名を褒め称えます。新たな時を恵みの内に備えてくださり感謝致します。“真の救いは信仰のみ、キリストのみ”との言葉により、洗礼から聖餐に至るまで、宗教改革者の遺産が受け継がれ、また宣教師たちの尊い働きによって、キリストの福音が宣べ伝えられ、今も尚、教会があることを重ねて感謝致します。その中で、私たちは信仰の先達者たちと共に御手の内にあることを覚えます。聖書は、“世があなたを憎んでも驚くことはない、私たちは自分が死から命へと移ったことを知っている(1ヨハ3:13-14)”と綴ります。殊に今朝は、信仰の先達者たちを心に浮かべつつ、御遺族の方々と共に御前に額ずく時を迎えられました。信濃町教会の歩みの中で、主が希望と忍耐をもって私たちを養い、また導いておられることを思い起こします。主なる神は、御子イエスの御復活の命と共に、一人ひとりに新たな命を与え、私たちは主の御声に聴き従い、この時を迎えています。

過ぐる一週間、主なる神は御心にあつて私たちを祝福の内に置いてくださいました。重ねて感謝致します。しかし、思い起こす日々は、御心から遠くあったことを改めて思い、ここに悔い改めを申し上げます。どうか主の御赦しの内にありますように。欠けの多い私たちであっても主なる神は私たちを見守り、また猶予をもって新たな時と場所とを与え、御心を知る時を与えて下しました。今より後も、あなたへの献身の思いを新たにし、救い主なる御子イエスを、“真の人にして真の生ける神”と告白し、御光の内に歩む者となりますように。また、“この有限なる世に起こる出来事は御心に適わない姿”も告白します。

主に招かれた私たちは世界の平和、また日本の平和のためにも祈ります。世界の混乱、自然災害に明日をも見失い、絶望に陥る不安や苦しみ、また悲しみ、困窮の最中にある人々に、主の慰めと癒しがありますように。一日も早く主の平和が訪れますように。共に主を見上げ、主の平和に生きる者となりますように。私たちキリストに従い行く者として、為すべき務めが為せますように。復活の主の御力にあつて耐え抜く強さを願います。御霊をもって私たちを守り、主の正しき真理を、私たちの内に得させてください。

主の御体なる教会の働きも苦難の世にあつて宣教の闘いが続きます。主の証人としての歩みが豊かにあり続けますように。また主の御力のもとに御業を証しすることが出来ますように。また心にあつても、この場に集い得ない人々、また様々な思いにあつて遠退いてしまっている人々にも主の御手が差し伸べられ、なお復活の主にあつて、新たに生きる力が与えられますように。今、この時、同じくして礼拝を献げている全世界の教会の礼拝が主に喜ばれるものとして献げられ、教会の働きが豊かに用いられますように。

これより牧者の口を通して語られる御言葉が、主の御霊の導きを豊かに受けて届けられますように。また聴く私たちが御言葉に新たに活かされ、希望をもって歩めますように、更なる御助けを願います。

真の命なる復活の主にあつて、主の御国を待ち望みつつ、マラナ・タ(主よ、来たりませ)と、救いの源なる主に希う諸教会の祈り、主の御国が来ますようにと祈る信仰の友の祈りに合わせ、尊き主イエス・キリストの御名

によって御前にお献げいたします。アーメン。

合唱：〈KYRIE〉「主よ、憐み給え」 聖歌隊

説教：「ここに希望がある」

佃 雅之

朗読されました『ヘブライ人への手紙』は“慰めの手紙”とされています。苦悩に満ちた地上にあって、「信仰」という見えない希望に生きるということは簡単なことではないからです。今日の個所に名前が挙げられていますアベル、エノク、ノア、アブラハム、サラは旧約聖書に登場する人物です。この手紙には、信仰によって救われた一人ひとりの歩みが具体的に書かれています。“信仰とは何か”、ということを知りたいと思うなら、学問的な営みに頼るのではなく、信仰に生きた人々を知ることが肝要であるからです。実際に信仰に生きた人たちが、神さまを心から信じて生き抜いた結果、神さまから、どのような恵みを与えられたのかを知ることが何より慰めとなり、励みになるものです。

今朝の礼拝は、私たちよりも先に神さまの許に召された方々、信仰の先達たちを覚えての礼拝です。私たちは、今、多くの神の証人に囲まれて礼拝を守っています。教会で献げられる礼拝は、地上に生きる者だけで献げられているのではなく、天にある者も共に礼拝を献げています。特にこの朝は、昨年の永眠者記念日礼拝以降に逝去された兄弟姉妹の名をお呼びして、親しい交わりを思い起こしつつ、慰めと励ましを受けたいと思います。

宋戸 峰子さん	2023年11月17日逝去
松永 仁さん	12月3日逝去
志賀 貢さん	2024年1月20日逝去
田崎 幸子さん	1月21日逝去
栗飯原幸子さん	4月6日逝去
真柳 信子さん	4月21日逝去
内田 芳子さん	6月14日逝去
舟橋由美子さん	6月16日逝去
池田美智子さん	9月9日逝去
行木 康雄さん	9月28日逝去
久保 和子さん	10月19日逝去

以上11名の方々です。

死というものは全ての人に確実なことです。私たちもいずれ死を迎えることとなります。しかし、信仰によって生き、信仰によって死んだ者は決して失われた人々ではありません。キリスト者は私たちの罪を贖うために十字架で死なれたイエス・キリストに結ばれています。キリストと共に生き、キリストと共に死んだ者は、キリストの恵みによって復活の命が約束されています。「信仰とは」単なる理論ではありません。信仰は経験です。信仰の確かさを自分が知ることが大切なのです。

「信仰とは」何でしょうか？ それは「望んでいる事柄を確認し、見えない事実を確認することで」と聖書に記されています。「望んでいる事柄を確認する」というのは、“神が望まれている事柄を信じ、神の言葉を自分の人生の土台とする”ということでしょう。「見えない事実を確認する」というのは、“今はまだ人間の目では見て確認することが出来ない事も、将来神さまが必ず実現して下さる”ことを信じることです。信仰は人間の能力によって獲得できるのではなく、神が与えてくださるものがあります。目で見ることの出来ない神への信頼を持つ者に与えられるものなのです。名前の挙げられている人たちは、神は約束されたことを必ず実

現して下さると信じました。神の言葉を信じ、喜んで神の約束の言葉に従った人々です。信仰のない人は目に見える事で確信を得ると言います。反対に、信仰のある人は目に見えるものも実は目に見えないものに支えられているということに気付くことができます。目に見える事柄だけに心奪われなくて、目に見えない真理に、目には見えない神に信頼して生きることを知っているということでしょう。

私たち人間は目に見える世界だけに生きてはいません。人間の心は目には見えません。『心』というものは、精神、思い、内面、魂など、様々な言葉換えることが出来ますが、目には見えない働きのことです。生きる姿勢、そのものと言ってもいいかもしれません。ですから聖書では、心を神と出会う場所と理解します。人の前では、私たちは自分を隠すことも、自分を繕うこともできます。しかし、目に見えない神を前にしたときに私たちは偽ることも、自分を隠すこともできません。目には見えない神を信じる時、人は心の変革、内面の変革を経験するのです。今、私たちが集っています教会は目に見えます。しかし、この目に見える教会が何のためにあるのかと言えば、目には見えない神を指し示すためにあるのです。私たちは主の毎日にここに集い、見えない神の霊に触れてここから再び立ち上がり、この世へと派遣されていきます。この世にあって主の日に戴いた神の言葉が真実であることを確かめるのであります。

今日の個所に名前の記されている5人は、信仰のゆえに神に認められた人々であります。アベルは神によって最初に人間として創造されたアダムとエヴァの次男です。アベルは信仰によって兄のカインに勝った犠牲を神に献げた人です。兄のカインは神さまに自分のことだけを見ていて欲しいという自分を第一とする思いを持っていたのに対して、弟アベルは常に神さまに喜んでいただけることだけを自分の喜びにしていた人として描かれています。その信仰のゆえにアベルは「正しい者であると証明されました」。手紙の著者は「アベルは死にましたが、信仰によってまだ語っています」と言っています。「正しい人」の善き業は、その業を行った人が死んでしまった後も長く語り続けられるということです。今はこの地上には居ないけれど善き業を行った人自身が語り続けるというのであります。

エノクという人は神と共に歩んだので神さまはエノクには「死を経験させずに、天に移されました」。聖書は“神がお移しになった”ので彼が「見えなくなった」ことを伝えています。エノクは弟アベルを殺した兄カインの子供です。最も罪深い人の子供であっても、神は「信仰によって」救いをお与えになりました。私たちは愛する人の死に直面すると、見えなくなった、この世から居なくなったという事実だけに心を奪われてしまいますが、「信仰によって」、「天にお移しになれる」という神の慈しみを信じ受け止めたのです。

今日の礼拝では『詩編』136篇も読まれました。神の慈しみを讃えた壮大な詩です。神の慈しみは、天地創造の御業から始まり、地上の救いの出来事は全て神の慈しみによるものであることが告げられています。私たちに毎の糧をお与えになるという御恵みは、全て神の慈しみによる業であります。136篇には「慈しみはとこしえに」という事が何度も繰り返されます。私たちキリスト者には「慈しみ」という言葉を「キリスト」と読み替えることが許されていると言われています。父なる神の聖なる御業が、キリストによって引き継がれ、今も私たちを養い、支えてくださるからであります。

ノアという人についてはよく知っている方も多いのではないのでしょうか。ノアは神の言葉を信じた人として知られています。周囲の人たちからは根

掘も現実味もない事と言われながらも、「自分の家族を守るために箱舟造った」のがノアです。人からどう思われようと、神を信じる事が出来たなら、本当に「望んでいる事柄を確認し」、喜びの中に立つ事が出来るのです。

今日の個所に書かれています信仰の証人の記録の中で、最も大きく描かれているのは「信仰の父」と呼ばれたアブラハムです。アブラハムの歩みについて、私たちが第一に注目したいことは、「信仰によって、アブラハムは」、神の言葉に「服従し、行き先も知らずに出発した」ということです。私たちは行き先に不安を覚えると将来に背を向けて過去にしがみ付いてしまいます。あるいは反対に、過去に犯した罪や失敗ばかりに拘って、前に向かって進むことが出来なくなってしまうことも多くあるように思います。けれども、私たちが信仰をもって歩もうとするなら、罪赦されて、過去からも解放されて、行先を知らなくても前に向かって進むことが出来るのです。何故なら、行先を示して下さる神が共に歩んで下さるからです。アブラハムの妻サラは高齢でありながら命を宿す力を与えられた人です。サラから多くの子孫が産まれました。「信仰による」出来事であります。

ここに紹介されています人たちは、キリストの誕生より遙か昔、来るべき善き訪れの前触れとして地上に現れた人たちであります。生身の人間である彼らは、迷いや弱さ、身勝手さや不信も抱えていました。しかし彼らに共通して言えることは、「彼らは神を喜ばせた人たちであった」ということです。6 節に「信仰がなければ、神に喜ばれることはできません」と書かれてある通りであります。この人たちは厳しい生活の中で、想像を絶する苦しみの中にあっても、信仰を告白して死んで行ったのです。自ら神に近づき、神と共に歩んだ人生であるから、彼らは「望んでいる事柄を確認し、見えない事実を確認することができました。彼らは死にましたが、確信と希望を抱きつつ死んだに違いないのです。彼らの死がはっきりと告げていることは、自分たちがよそ者、「仮住まいの者である」という自覚でした。この世においては何かを成し遂げた完成者ではなかったということです。彼らの目指した場所は、遙か先であって、今は、常に途上です。生きている間は道半ばであったということでもあります。

信仰生活というものは、何処まで到達できたかが問題にはなりません。どれだけのことを成し遂げたかが究極の価値にはなりません。その人が何をしたか、どんなに大きな業を為したかではなく、たとえ小さな目立たない生涯であっても、その人が何を信じたかが問われているのです。大切なことは、自分に与えられた道のりを走り通すことです。彼らには死に向き合っても喜びがありました。「信仰を抱いて死ぬ」ことが出来たからです。「天の故郷」を仰ぎ見て、喜びと希望を抱きつつ生きたのです。彼らは命を失ってから神の言葉を信じたのではなく、地上での命がある間に神を信じる事が出来ました。この事が重要です。神によって造られ生きる者とされた人間にとって、このこと以上に幸いなことはありません。彼らは誰一人、非の打ちどころがないような完全無欠な人であったわけではないのです。ただ、「信仰によって」救いに招かれ、神の愛によって天国という永遠の居場所を与えられた人たちであります。

信仰者は何時も喜んで、何時も祈っている、何時も感謝している。何故か？「天の故郷」を見ているからであります。彼らの信仰が今も私たちに語りかけてくれるのです。

私たちは、毎年、11月の第一日曜日を『永眠者記念日』として礼拝を献げています。私たちは今日の聖書に書かれていた信仰の先達たちから、そして

また、これまで信濃町教会の100年の歩みに加えられた信仰の先達から、信仰のバトンを渡された者としての責任が問われていると思います。私たちの交わりは礼拝によって天と地の隔てを超えます。今、私たちは、信仰のゆえに神に認められた大勢の信仰の先達と一緒に礼拝を献げています。神にとっては今日の個所で名前の挙げられていた人たちも、今日のこの礼拝で名前が読み上げられた私たちの兄弟姉妹たちも、今共に生きている人たちなのであります。私たちの生と死を支えて下さるのはイエス・キリストです。信仰とは信仰の導き手であり、またその完成者であるキリストとの間の霊的絆であります。この事実を具体的に確認することが出来る場所が教会です。ここに希望があるのです。神に選ばれ、教会と出逢い、キリストを救い主として信じる信仰を与えられた者は本当に幸いであります。

お祈りを致します。

聖なる神、私たちはキリストの復活の力と信仰の先達の証しに支えられて今ここに立っています。私たちは皆、この世では旅人であり、生涯信仰の途上にある者ですが、あなたが、私たちが目指す故郷を準備してくださっておられることを知りました。感謝致します。願わくは過ぐる日、御許に召されました兄弟姉妹たちと共に私たちをも憐れんでくださり、永遠に変わることのないあなたの信実に望みを置く者とならせてください。主よ、どうぞ、私たちの進む道を豊かな祝福をもって充たしてください。

死と恐れを暗闇を打ち砕いてくださいました私たちの救い主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌:520「信実に清く生きたい」

聖晚餐 ニカイア・コンスタンティノポリス信条の告白 和解の挨拶

讃美歌:81「主の食卓を囲み」

献金・感謝(増田多可子)・主の祈り(讃美歌21 93-5A)

天の父なる神さま、あなたの聖名を賛美致します。一人ひとりの名を呼んでこの礼拝に招いてくださったことを心から感謝致します。

私たちは本日、佃先生を通して御言葉を説き明かして頂きました。この戴いた御言葉を心に留めて、心の糧としてこの一週間を歩ませていただきますように。

私たちには必要な物を全て与えられて主の僕として生きることを赦されております。今、夫々が与えられた物の中から感謝と献身の徴として御前にお献げ致しました。どうぞ祝して教会の御用のために用いてください。

主が教えてくださった「主の祈り」を共に祈り、この一週間を始めさせていただきます。「主の祈り」…アーメン。

派遣:讃美歌91「神の恵みゆたかに受け」

派遣と祝福 司式:主は言われます。「私は誰を遣わすべきか。 会衆:私がここにおります。私を、お遣わして下さい。司式:「父が私をお遣わしになったように、私もあなた方を遣わす」と主は言われる。キリストの平和の使者として行きなさい。>

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたが一同と共にあるように。アーメン。

報告:特記無し

後奏:「あわれみたまえ、永遠に父なる神よ」(J.パッヘルベル)